

落したくても、一人たりとも捕虜になることは軍の面目が許さぬと、あくまでかりたてて奥へ奥へと移動させ、その挙げ句、足手纏いになるとして、終戦になっても山を下りることを許さなかった。軍の命令に背き勝手なまねをすると、内地には返さないとおどされていた。祖国の土を踏むことだけを夢見た人たちには、それは最も恐ろしいことであった。

比島は一月が乾季、四月、五月が一番暑く学校は夏休みとなる。八月は雨季、文中アシン河に水量が増したり雨ばかり降っているというのは、雨季となっているからである。

御子息宣昭氏は「父は厳格で曲がったことのできない潔癖な人である反面、人には深い優しさを持っています」と語る。また御息女侑子様は「父は外見的には相当ワンマンであるが、何でも父が言い張ってことを決めているように見えるが、結局決まったことは母の言う通りになっていました。父と母は表現の仕方に違いはあっても、心は一つのように見えました。両親は二人の間ではなく二人で一つのものという本当の夫

婦愛を見せてくれました」と語る。

(東京都引揚者団体連合会)

常務理事 大平 禮子)

## 台湾からの引揚者の労苦

東京都 織 田 憲 吾

私は昭和三年山口高等商業学校(現山口大学)を卒業し台湾総督府交通局に就職いたしました。当時の日本は大不況の真っ只中でした。前年、浜口首相が東京駅で暴漢に銃殺されるという事件のあったころでした。当然、就職難の時代で、今では考えられないほど仕事もなく、困難な時代でした。私は職を外地に求めることにし、台湾総督府の財務局と交通局を受験しました。両方共採用通知を受けましたが、交通局の方が一日早く通知をくれましたので、交通局鉄道部に就職いたしました。

故郷佐賀県出身の先輩が三井物産台北支店に勤務中

でしたので、挨拶に行きましたところ、「なぜ財務局を選ばなかったのか」と言われましたが、私は交通事業を選んだことに少しも不満はなく、天職と思いつい生涯この地で頑張るつもりでおりました。

就職後、初めの三年間は現場第一線で働かなければなりません。台北駅と基隆駅で貨物取扱の業務や旅客取扱の事務の修得、基隆埠頭事務所での倉庫事業についても、実習させられました。

その後本部の庶務課、運輸課などで鉄道事務の修得をしました。

少し業務にも慣れ、落ち着くと新天地の珍しい景色を見て歩きました。気候温暖で香り高い珍しい果物などたくさんあり、外地へ来たんだという感じがありません。

台湾も統治を始めたころは、島民の抵抗運動が絶え間なく、総督も次々と交代し、いろいろと大変だったとのことです。私が赴任したころは、島も落ち着いていました。

しかし、台湾鉄道内部でも鉄道省の本省から出向し

た部課長、係長、課員たちと、台鉄の子がいの職員との間では、対立感情が出てゴタゴタもめていたので、日本人の島国根性をもって生まれた人と人との対立を見て、悲しくなりました。私は現地の皆様とも親しく交わり、また、東京事務所勤務などあり、故郷へも帰り、長男として両親を安心させることもできました。

ところが昭和十六年太平洋戦争が始まり、戦況は次第に悪化してきました。日本の本土ばかりでなく、台湾も毎日空襲を受けるようになってきました。私は妻子を日本に帰し、官舎に一人で暮らすことになってしまいました。

自炊をし洗濯をし、時には掃除もしなければなりません。そこで部下とその家族と一緒に住んでもらい、家事を手伝ってもらうことになりました。慣れない雑用は今日まで経験したことがなく、ほんとに大きな苦労でした。それ故、同居者の手伝いに私は本当に助けられました。

そのころから私は、全島各地の自動車事務所を訪問しておく必要がありました。ところが花蓮港で空襲に

遭い避難所に飛び込むとき、おでこをいやというほど打ってコブができました。屏東ではP38編隊(米軍機)

が、私たちの乗っていたバスを襲撃してきました。とっさにバスは林の木をなぎ倒し、その中に突っ込むようにして隠れ、何とか助かりホッといたしました。

次は、鉄道で高雄に行く途中、又もやP38数機の空襲をうけ、車中の客が銃弾で頭をうたれ即死、私は列車を飛び降り窪地に滑り込んで又もや命拾いをいたしました。また、私たちの鉄道本部も敵機の攻撃を受け、外に出たときはバラバラと銃撃されましたが、私には命中せず生き延びることができました。このように戦争による大きな労苦はさげられました。

台湾軍には、話のわかる人もいましたが、強引に自説を押し通す人もおりました。勇ましい軍人がハト派を抑え、台湾鉄道を全部台湾軍が掌握しようと考えており、それが実現しそうな気配を感じるようになりました。この軍部の要求は、鉄道部役人としては最も困ったことでした。交通局総長や、特に鉄道部長は「実にけしからん、鉄道運営の素人が、鉄道を支配すれば混

乱をきたすばかり」との意見でした。部議は決まりました。

一、台湾鉄道の台湾軍による掌握は混乱をもたらすことを、鉄道省に申し入れること。

二、鉄道省の支援を得て、織田は参謀本部に赴き、台湾軍の強攻策を差し止めさせること。

この命令を受けて東京空港行き航空機に乗り、上京せよとの指令でした。

日本の制空権は既に米軍に握られていて、末期的時期になっていました。私は次のように答えました。

「この時期に私に上京せよとの指示は死ねとの命令ですね。日本には既に制空権はありません」

「命令である以上出発します。身命を賭してやってみましょう」

私はそのとき、死を覚悟しました。身も心も生きる希望を見いだせず、とにかく東京行きを決意しました。出発は敵機の攻撃を避けるために夜間松山飛行場より離陸いたしました。

搭乗後、間もなく機内アナウンスがあり、「沖縄は

すでに米軍の手に落ちていて、航行できない」またア  
ナウンスがあり、「本機は上海空港に着陸変更」と伝  
えられ、これはえらいことになったと直感しました。

いつ米軍機におそわれるかわかりません。それからま  
た、アナウンスが流れました。「上海空港米軍機に攻  
撃される、上海着陸不能」次に、またアナウンス「本  
機は南京飛行場向け進行中、着陸は南京空港とする」。

南京に着き、私は日本軍の宿舎に宿泊しました。そ  
れから毎日毎日、南京空港に行きましたが、内地行き  
の航行機は全く出ません。七日間も南京に留められ、  
これでは日本は戦争に負けるのではないだろうか。そ  
うなれば私たちは苦力にでもなって骨を南京に埋め、  
この地の土になってしまおうのであろうか、とさえ思い  
ました。

外地と本土の間をこんなに道のりが遠く長く感じた  
ことは、ありませんでした。

八日目に、日本行きを決死強行するとの通知があり  
ました。南京空港で次のような日本軍の発表がありま  
した。

(一)本機は決死行である。

(二)出発は夕暮れにする。

(三)飛行中、各人は肉眼で空を見つめ敵機が現われれ  
ば即報すること。

四九州に近づけば敵機に発見されないため、海面ス  
レスレに低空飛行する。

私は体験の結果、肉眼で敵機発見を見つめていれば、  
目が疲れ長続きできないことを知りました。それでも  
何とか無事に九州に近づき、かすかに陸地が見えはじ  
めました。機は左に旋回佐賀県、長崎県の海岸線が見  
えてきました。やがて福岡県の雁巣がんす飛行場に着陸し、  
安堵しました。私たちは博多駅前のホテルに宿泊しま  
した。すっかり神経をすりへらした旅でしたので疲れ  
果てました。

ホッとして、食後ベッドで寝ようと思いましたら、突  
然、空襲警報発令、人々は大声で避難を呼びかけ、地  
下の防空壕へ入りました。何はともあれ一日も早く、  
上京しなければならなかったのが急ぎました。やっ  
このことで博多から乗車したが、小郡で鉄道は止まっ

てしまいました。やむなく山口市の妻の実家に行き一泊しました。翌日、にぎり飯に、大豆の煎ったものとトマトをもらって、小郡駅から上京の途につきました。広島に着くと、あたり一面が焼野が原で、駅のホームに残った水道管から水がポタリポタリと落ちていただけでした。数日前原爆を投下された広島の状態だったのです。

やがて大阪駅に着くと、「全員下車」との指示、駅舎のコンクリートに古新聞を敷き、荷物を枕にして一夜を過ごしました。

それからまた車中一泊の後、やっとのことで丹那トンネルに入ると、又もや列車は止まりました。何時間もトンネルの中に閉じ込められました。車掌からの放送で、東京は大空襲とのことでした。列車は空襲を避けていたのでした。数時間後、夕方にやっと動き出しました。

何日も食べる物がなく、ゆっくり睡眠もとれず、体力も衰えてきている。私は小田原で下車しました。ホテルも旅館もとれず、やっと木賃宿に泊めてもらいま

したが、夕食もなく寝床では、蚤か虱かに悩まされ、十分の睡眠はとれませんでした。

翌朝、午前四時に起き、東京行きの列車に乗り、八時ごろ無事東京駅に到着しました。それから歩いて日比谷の公会堂内にある、台鉄事務所に行きました。ところが、入口がまだ開いていない。そこで公会堂の石の階段に腰を掛けて待っていました。九時ごろになり、ようやく事務所の人が出勤してきて、案内するから、と言われたので階段をのぼろうとしましたが、疲れ果て、なかなか上ぼることができず、事務所の人に助けられやっとたどり着きました。欠食と心労で半病人のようになり、ソファーに横たわりました。

やがて事務所長も出勤してきました。係員に「朝食はどうしましたか」と尋ねられ、「このところ、丸っきり食べる物が無く、水だけ飲んで生き延びて、東京にたどり着きました」と答え、また出張目的を話し、南京から東京までの苦労を、報告いたしました。一同は大変気の毒がって、「ここに私の昼の弁当があるので食べてください」とすすめてくれました。私は、

「それはあなたのお弁当でしょう」と言って遠慮しましたが、その人は、「私は毎日食事をしています。一食抜いてもかまいません」と言って私にくれました。厚意を謝して、食べようとしたのですが、どうしてもどにつかえて入らない、そこでお茶をもらい、御飯にかけて流し込みました。このときの卵焼きがおいしかったことを記憶しています。御飯を何とか流し込むと、急に眠くなり風呂敷包みを枕にして、ソファで眠りました。

ぐっすり二時間余り眠り、目を覚ますと驚いたことに、元気がモリモリと出てきました。このとき、私は苦しい体験をしたと思うより、食事と睡眠が人間いかに大切かということをもっと体験しました。長期間欠食のあと急に固い御飯を食べるとおなかをこわすとか聞いていましたが、私は不思議にも無事でした。

東京到着は十四日、翌日の八月十五日は終戦の玉音放送の日でした。鉄道省の八階に集まるようにとの連絡がありました。終戦の詔勅は大臣列席の下で聞きま

した。「日本は戦争に負けたのだ」女子職員は声をあげて泣き、男子もまた目に涙を浮かべておりました。大敗戦！私は何も知らず用務のため旅を続けていたのです。

終戦により私の危険を冒しての出張目的はなくなり、全く無駄になってしまいました。ポツダム宣言を受諾した日本は、台湾を失うことになるであろうか、などと考えている矢先、「至急台北に帰任せよ」との電報が入り、直ちに帰任の準備をいたしました。役所の手配により意外にもすぐ航空便がありました。今度は、東京から台北まで支障なく帰任することができました。

出張の前とは異なり、台北の本部は大変な混乱ぶりでした。その混乱の中にあつて私は、戦争に敗れた現在の日本国を思い、今日まで日本国政府の一人の官吏として、この国の政治を進める活動に協力してきたことを思い、日本国の将来を案じ深い苦しみと悲しみを、心に持ちました。このときは、現在でも忘れられません。これからは、

(一)台湾は中国の領土となる。

(一)台湾鉄道は中国政府に接収と決定。

それこそテンヤワンヤの有様でした。私も戦後処理の仕事に専念する毎日でした。

ある日、鉄道本部長より電話で呼び出しを受けました。「至急本部長室に出頭せよ」とのことでした。出頭すると、本部長から厳命がありました。

(一)日本はこの台湾鉄道を中国政府に引渡す措置を至急とること。

(二)そのため鉄道接収本会議を開催する。また、この会議の責任者は次の通り決定した。

①中国政府は鉄道運営の責任者を陳成文氏とする。

説明責任者は別途決定する。

②日本政府の引渡し説明責任者は織田憲吾とする。右の通り本日決定した。

突然の思いがけない、この通告に驚きました。こんな重大な責任のある仕事を、一事務官の私になぜ決定されたのか、「本部には私より優秀な先輩諸氏が沢山いるのに、これらの諸氏が任に当たるべきと思います」と進言いたしました。

これに対し本部長は、「中国政府もすでに了承している。中国語ができなくても、両者は英語で話し合うことになっている。御苦労なことではあるが、引き受けてほしい」とのことでした。私も過重な負担を負わされ、即答できませんでした。しかし、もう決定し、上司の命令であれば引き受けなければなりませんでした。

急な、しかも重大な命令を受け、しばらくは興奮状態でした。しかし、決定した以上は、冷静に引き継ぎ業務を果たさなければなりません。英語の辞書を片手に睡眠時間をへらして、挨拶文を作成することにいたしました。

戦勝国側の中国に対し礼を失わず、またこちらも卑屈にならず、そして私たちの気持ちも伝えたい。

この任務はつらいものでありました。私たち日本人が終生、この地、この鉄道局で働くつもりで、日夜整備充実を念願し努力してきたものを、敗戦という厳しい現実の前で、無条件で引き渡して撤退しなければならぬのです。せめてもの慰めは、今まで一緒に働い

てきた台湾人の従業員が、そのまま引き継ぐことであり、今後も真面目に鉄道運営を続けてくれるであろう、ということでした。その気持ちは、かわいい我が子を手放さなければならぬ親の心情にも似た悲しみもありました。

本部長より呼ばれ、「明日、大会議室において鉄道接収引渡式が挙行される」と伝えられました。具体的説明内容はどのようにするか、

(一) 今後の運営につき日本として中国政府に正面から指令する立場ではない。

(二) 台湾在住の従業員に対する要請につき、指示することはできない。

(三) 台湾籍従業員の真面目さは言及したい。

(四) 将来台湾鉄道の運営は、うまくいってほしい。

(五) 台湾鉄道の使命について言及する。

以上、五項目を念頭におき、次のような挨拶文を英語でまとめました。

(一) 台湾鉄道は台湾民衆の生活と、その民衆相互の交流に貢献している。

(二) 経済の発展と文化の向上に寄与してきた。

(三) 鉄道運営に当たっては、日本人も台湾人も一致団結協力してきた。

(四) 日本人引揚げ後も台湾鉄道の発展と近代化を祈る。

(五) 台湾鉄道と従業員がすべての人々から愛されることを祈ります。

最後の項目のうち、従業員につき言及いたしましたのは、伝え聞くところによりますと、中国大陸から台湾へ渡り住みついた人の中には、中国本土で好ましい待遇を受けられず、台湾へ移住した人がいるとのことでした。これらの人々に対して、大陸からきた上層部の人たちが愛情を持って遇ってほしい、円満に働いてもらいたいと思う私の老婆心からでした。

翌日午前十時ごろから大広間で台湾鉄道接収本会議が開催されました。

日中両国の最高責任者たる武部英治氏と、陳成文氏を入れて列席者は十余人だったと思います。日本側は武部本部長と私と二人だけで、あとは中国側でした。

台湾人は一人もいませんでした。

会議は静かに始まりました。私は前述の挨拶文を英語で読み上げました。双方の説明は英語ということでしたが、中国側の説明責任者は意外にも中国語で、しかも早口で述べましたので、私たちは、どのような表現であったのか全くわかりませんでした。かくして会議は終わり、引渡しは完了し、一抹の寂しさはありながらも任務を終え、ホッとしたのも事実でした。

用事も済み、後は故国へ引き揚げることになるだろうと思いました。すぐにも日本に帰国し家族に会えるものと思っていました。ところが、中国首脳が鉄道部長に対し、「織田をしばらく留用する」旨伝えてきました。

台湾鉄道今後の円滑な運営のため、留用するということでした。それは私ばかりでなく、現場の技術者たちは更に長く留用されることになりました。中国側としては急に日本人が帰国してしまうと、運営管理が不安だったのでしょう。彼らも私もからいろいろと学びとらねばならない。言わば、こちらが管理的、技術的なことを教える立場だったためもあり、特別の人を

除き、一体に敗戦国民に対する高圧的な扱いは、あまり聞いておりませんでした。私の留用期間も三カ月ぐらいかと思っておりましたが許可が出ず、帰国要請に行きました。しかし否決されました。半年たち再度帰国願いに行きましたが、要望は聞き入れてもらえませんでした。一体いつになったら帰してもらえるのかと、だんだん不安になってきました。

いろいろ考えているうちに、ふと中国には、「三顧の礼」という言葉があることを思い出しました。三国志の劉備元徳が諸葛孔明を軍師に迎えるとき、二度も断られても、三度礼をつくし頼み、ついに願いを聞き入れられ、迎えることができたという故事です。私も意を決して中国要人の宿舎に行き、英語と不十分な中国語で次のように話しました。

(一) 私は織田家の長男である。老父母を扶養する義務がある。

(二) 妻子は戦争のため、日本へ引き揚げて小生の帰国を待っている。

すると彼は、「ミスター織田、日本は今食糧もなく

敗戦の混乱で大変だと思う。いっそ帰化して、こちらで暮らしてはいかがですか。家族を台北へ呼び寄せたらよいでしょう」と思いがけないことを言われ驚きました。私は答えました。

「家族全員の強い希望を、無視することはできません。老父母には大変な親不孝になります。子供は教育途上で、これから台湾には日本語学校もなくなれば、とても無理です。何とぞ帰国を許可してください」

彼はしばらく無言で考え込んでおりました。そしてやっと回答しました。

「事情はよくわかりました」

「帰国を許可しましょう」

「あなたの長期間の台湾滞在に感謝します」

そして私の手を握りました。私も本当にホッととして固く握りかえました。

鉄道本部の人たちも大分日本へ引き揚げて、寂しくなっております。私も早速帰国の手配をいたしました。懐かしい日本の土を早く踏みたい。

私が乗る船も決定しました。出発は基隆港からです。

その埠頭に立っておりました。私の乗るべき船が岸壁に横づけされています。突然、「織田さんですね」  
「私は台湾鉄道に勤務している者です。織田さんが本日、日本へお帰りになるということを知りました。私は、一言お礼を申し上げるため、高雄の近くから出て参りました」私はこの人の顔に見覚えがなく、名前も記憶しておりません。この人にお礼を言われる覚えもないので、黙っておりました。

「織田さんは、私の恩人です。私たち台湾人は日本人と給料で差別待遇されておりました。月給九十円で昇給ストップでした。私も九十円になり、今後、昇給はないものと覚悟しておりました。ところが更に昇給が認められ、実はビックリしました。なぜだろうと事情を調べました。台湾鉄道本部の幹事会議の席上、織田さんが『台湾人の給料を月給九十円以上昇給させないということは不都合である。優秀な者にはこの枠をはずすべきだ』と主張され、それについて本部長も検討され承認されたと伝え聞きました。私はその恩典にあずかり、大変嬉しく思いました。この御恩を受けている織

田さんの帰国を聞き、どうしてもお礼を申し上げたくまいりました。どうぞ、この果物をお召上がりください」と香り高い果物を籠に入れて持参してくれました。私は当然のことをしたのですが、彼の「受けた恩は忘れてはならない」という厚い人情は、敗戦により引き揚げる私にとっては、本当に嬉しいはなむけの言葉でした。

長年過ごした台湾をいよいよ離れることと、彼の見送りなどで胸いっぱい私でしたが、次に待ち受けていたのは、敗戦国民としてのいやな現実でした。

乗船前に下手な日本語で「荷物の検査」と称し現地人から、洋服のポケットの中の物まで出させられ、郵便貯金通帳や貴重品を、取り上げられてしまいました。「本当にこれが検査官なのか」と思いましたが、ここまで来て、もし問題でも起こし帰国が遅れると面倒だと思い、我慢し乗船しました。帰国後これらのことは証拠もなく、「これが敗戦というものなのか」としみじみ思いました。この検査官の行為は引揚者が戦勝国民から受けた苦しみの一つでした。

しかし台湾引揚者は他の地からの引揚者に比べ苦勞は少ない方だと思いました。現場の人たちは特に現地人と苦樂を共にして働いてきましたので、親しみも深く終戦後も夜ひそかに米を届けてくれたり、帰国のときには送別会まで開いてもらったりしたとのことです。それは技術的なことを教えてもらったお礼の意味もあったのですが、敗戦国民としては、嬉しいことであつたようです。

帰国後、直ちに上京し、鉄道省に赴き引揚げの報告をいたしました。台湾時代の鉄道部長にまず、挨拶しました。「大変御苦勞でした。官房長にも君のことはよくお話ししておいた。また、面接していただくようにもお願いしてある」とのことで、早速官房長に面接し、帰国の挨拶を申しました。官房長は「敗戦前後の君の苦勞はよく聞いている。君は明日の発令でこちらで採用する」思いがけない言葉をいただき、大変嬉しく感謝いたしました。この就職難の折、引揚げ後の生活はどうして立てていこうかという最大の心配は、先輩諸氏の温かいご配慮により救われたのでした。

まだ両親や妻子にも会っておりませんでしたので、郷里や家族に会ってから上京、勤務ということにお願ひし、快く承諾していただきました。

かくて父母の待つ佐賀へ行きました。話すことはあまりにも多くあり、何から話してよいかわかりません。両親も嬉し涙にくれながら、無事の帰国を喜んでくれました。姉妹たちは元気で父母を守ってくれていましたが、三人の弟たちはまた大変でした。すぐ下の弟は広東で病気になる帰国後入院し、次の弟はシベリアに抑留され、下の弟はフィリピンから戻っておりませんでした。四人も男の子がいながら皆戦争や外地で留められ、無事であるか、どうかと片時も心休まらない日々だったとのことでした。

妻子は山口市の妻の実家に世話になっておりました。ここもまた、姉や兄の家族が外地から引き揚げて大勢同居して大変なようでした。私が台北の郵便局から毎月ここに送金していた家族の生活費が着いていないと聞き、本当に驚きました。どうなっていたのか全くわかりません。食料品をはじめ物資の乏しい戦中、戦後、

闇値でなければ物が手に入らない時代に、家族は全く心細い思いをしたことでしょう。特に戦後のインフレは、かつて経験したこともないものでした。少しでも思つて妻も慣れない内職をしたりしていたようです。結局、妻の実家には物心共に大変な世話をかけ、負担をかけてしまい申し訳なく、本当に済まないことをしたと思ひました。

その後、私が広島鉄道局の方へ転動になりました。久しぶりに台湾鉄道にかつて勤めていた方々にも会う機会があり、皆さんの消息を訪ねますと、全く驚くばかり、まだ就職の決まっていない方々が多数いることを聞きました。何とか仕事を探すことを手伝つてあげようと思ひ、あちこちの役所や私鉄関係や土地の有力者の方々を回つて頼み歩きました。何とか皆が一日でも早く就職し生活を安定させるようお願いしました。

皆様の協力のお陰でいろいろの所に約五十人ほどの人々の就職のお世話をすることができました。何だか自分のことのように嬉しくご協力いただいた方々には本当に有り難いと思ひました。

昭和四十年代の経済の高度成長により、私どもの生活も多少ゆとりもできたのでしようか、昔を思い出し、台湾時代のこと、終戦前後の苦しかったこと、引揚げの前後のことなど、かつてのことが皆懐かしく、何人か集まり話に花が咲き、だんだん大勢の昔の仲間との語り合う機会が欲しくなり、かつて台湾鉄道に勤務した者たちの会である、「全国台鉄会」ができました。勤務場所も仕事の内容も皆それぞれ異なっておりますが、台湾鉄道に勤めた人々の集まりです。

帰国後も台湾の人々との文通が続き、その手紙などを載せ、年二回会報が発行されています。台湾の人にも呼びかけ一緒に台湾鉄道で働いた仲間として会員になり、投稿してきたり親善に努めております。年一度の大会には必ず台湾の人々が参加してきます。

私どもも親善訪問をし、昭和五十六年には「台湾鐵路創建百周年記念」が催され、私たち一行のために、記念展覧会を期間延長して待っていてくれました。そして鉄路本部を案内してもらいました。我々が引揚げるとき願った、その発展と安定に敬意を表し別れまし

た。

民族は異なっても友好を続け平和を守りたいと思います。故国を離れて暮らす人々にとっては、平和が破れたときは即刻生命や財産が危機にさらされます。今後、どうか平和でありますよう祈ってやみません。一人の引揚者として振り返り当時のことを思いますと、台湾居住の日本人相互の抗争を聞くのは、苦しみ悲しみでした。また台湾人との小さな行き違いが複雑な問題の原因になる場合があります、こちらの善意が理解されないこともあります。しかし、それら乗り越えて、世界平和達成を目標にこれからも前進したいと思えます。

#### 【執筆者の横顔】

織田氏は、明治三十九年九月二十日、佐賀県郊外で生まれた。母が過労のため早産し、未熟児だったそうです。物心がついたときは祖父母も健在で、先祖の武士時代のことや、織田家の長男としての心構えなど、聞かされて育った。

佐賀師範学校付属小学校を卒業後、佐賀商業・山口高等商業学校へと進み、昭和三年に卒業。当時は就職難のため、職を外地に求めた織田氏は、台湾総督府交通局に勤務することとなった。

台湾に骨を埋める覚悟の織田氏は、まず現場からスタートして、いろいろな事業に携わり、本部の鉄道事務の修得を終えたころには、その地にも慣れ、周りの人とも親しく交わった。

昭和十八年には、高等文官試験合格、昭和十九年、高等文官となる。

昭和二十年、台湾も戦況が悪化して、空襲にも度々遭うようになった八月初め、台湾軍による台湾鉄道の掌握を止めるべく、鉄道省に申し入れられるようにとの使者に任命された織田氏は、日本に赴き苦勞の末、東京に着いた翌日、終戦を迎えた。再び台湾に戻った織田氏は、台湾鉄道を引き渡す日本政府の説明責任者となり無事にその役を終え、引き揚げてきたのが昭和二十一年四月のことであった。その際見送りにきてくれた台湾人の鉄道員の言葉は、織田氏の台湾における誠実

な人柄を、表している。

織田氏は、引揚げ後、運輸省陸運管理局を振り出しに、広島鉄道局鉄道課長、高松陸軍局総務部長、運輸省大臣官房審理官、日本道路公団参事、私鉄経営者協会企画部長に就任、昭和四十九年三月、日本民営鉄道協会常務理事を最後に、第一線から引退した。

その間、昭和二十二年四月、運輸省懸賞論文に応募、「わが国自動車交通の将来」という題で一等に当選する。

また昭和四十六年元旦、戦中戦後の混乱期に耐え、努力して支えてくれた妻千里さんを亡くした。

その後は、畑で野菜をつくったり、謡曲などを楽しみ、全国台鉄会会長を八年ほど勤め、台湾親善訪問や、台湾人の大会参加を呼びかけ友好に努めている。また私らと共に練馬台湾会をつくり、現在常任相談役となっている。

これからも平和国家・文化国家の一員としてよき国際人でありたいと念じている織田氏である。

(東京都引揚者団体連合会)

副理事長 土屋 米吉)